

《解題》

『農耕の世界、その技術と文化』

農耕文化研究振興会

さきに『農耕の技術（と文化）』誌の創刊15周年を記念して企画された本叢書（全8巻）は着々と刊行が進んでいて、既刊の第Ⅰ～Ⅱ巻に続いて、近々に第Ⅲ巻、年末には第Ⅳ巻が予定されている。

たくさんの優れた論文が『農耕の技術（と文化）』誌に今までに掲載されていたことを、あらためて「発見」される方も多いようで、そのような批評や読後感をたびたび耳にする。

それぞれの巻には下の諸論文の他に「解題」の文章がつけられている。収録された諸論文について、その分野の全体的視野からみた位置づけ、学問的意味を解説すると共に、その学的領域の将来展望などにも触れていて、独立した論攷として読むことも可能であろうかと思う。もちろん、各巻の諸論文を熟読していただくことが希望であるが、それらの論文の紹介を兼ねる3つの解題の文章をここに掲載して、ご参考に供したい。

第Ⅰ巻 農耕空間の多様と選択

佐々木高明：農耕文化の異なる論理

宮崎 昭：牧羊体系の自然的・社会的背景

廣瀬 昌平：畑作農業の変貌と農民の技術選択

長嶋 俊介：離島・島嶼における生活と農耕

山中 速人：民族意識の高揚と伝統農法

應地 利明：南インドにおけるシコクビエの栽培技術

福井 捷朗：火耕水耨の論議によせて

第Ⅱ巻 アフリカと熱帯圏の農耕文化

伊谷純一郎：ケニア遊牧民の潜在的農耕

末原 達郎：バシ人の焼畑農業

伊谷 樹一：タンザニア・トングウェの農耕

若月 利之：内陸小低地における西アフリカ型稲作

高谷 好一：掛け流し傾斜水田の事例

山本 紀夫：中央アンデスにおけるジャガイモ栽培と休閒

第Ⅲ巻 稲作空間の生態

高谷 好一：水田の景観学的分類試案

安藤 和雄：バングラデシュのアウス稲・アマン稲の混播栽培

宮川 修一：東北タイ天水田の生産量変異

五十嵐忠孝：西ジャワ・プリアガン高地における水稻耕作

古川 久雄：ルソン島の陸稲栽培とその環境

高谷 好一・立本 成文・古川 久雄：スマトラの小区画水田

農耕文化の研究をめぐって

—第Ⅰ巻解題—

渡 部 忠 世*

1. ethnobotany と ethnoagronomy

最初に、この巻に収録した7篇の論文に共通してみられるモチーフとでもいふべきところについて少し考えておくことにしよう。本巻に収録した論文は、対象の地域が日本、アジア各地、ポリネシアから東ヨーロッパなどにまで及ぶし、また大陸と島々、そこに行われる農耕の姿は稲作—水田と焼畑、畑作—イモやミレットの栽培、さらに牧畜など多岐にわたっていて、一見してバラバラのようにみえる。しかし、そのバラバラとみえる世界の農耕の多様さと、それを伝統的に選択してきたそれぞれの民族の姿にこそ、農耕本来の性格がよく表現されているといえる。いわば、画一的な工業文明の論理をもってしては理解しえない農耕文化の性格の存在を表現している点に、この第Ⅰ巻「農耕空間の多様と選択」の基本的特徴があるともいえよう。

そして、このような諸論文が示す学問的な領域をひとつにまとめると、既成のどの学問分野からみ出してしまうと、別の新しい範疇を考えた方がよいかと思われる。結論から先にいうと、この巻の論文に共通する学問の領域を、私は ethnoagronomy という言葉で表現できないかと考えてみる。後でまた述べるように「民族農耕学」とでも仮に訳しておくことにしよう。

これに近い学問的領域のすぐれた先駆者としては、先日一周忌をむかえた中尾佐助さんがおられる。この分野のことは、中尾さんのことを抜きにしては書きにくい。彼のことから書き始めることにしよう。中尾さんは『農耕の技術』の創刊号からの会員であったが、一度も論文を寄せられることがなかった。3

*わたべ ただよ、農耕文化研究振興会

年程前に何か書いてほしいと頼んだ際に、「大構想」を考えているので、近いうちにその序論でもと答えておられたのだが、残念ながらついにその機会がなかった。その構想がどんなものであったかは今となっては憶測できないが、中尾さんのことであるから、世界の農業を縦横に鳥瞰して、雄大な新しい農耕論を展開されたのではないかと思ったりする。

その中尾さんとの長い「交遊」について述べた追悼の文章を、最近に梅棹忠夫さんが書いておられる〔梅棹 1994〕。そのなかで、中尾さんの『栽培植物と農耕の起源』〔中尾 1966〕のことに言及されて、これが翻訳されて世界に紹介されていたならば、「日本の名著として」広く世にむかえられたであろうと述べておられる。

中尾さんがこの書物の中で述べられた世界の農耕文化複合の分類などについては、近年、若干の批判的見解や事実誤認というような指摘もみられるが、枝葉末節の論が大部分で、中尾さんの描いたひとつの「農耕史観」をこえるような批判はでていない。これの出版は1966年であって、今から30年近くも前である。当然ながら、それに先行するサワー〔Sauer 1952〕やマードック〔Murdock 1959〕の著作などを十分に参考にされているが、中尾さんの論旨はほとんどの部分で独自のである。今では高校生あたりでも「根栽農耕文化」とか「照葉樹林文化」などという言葉も、時には中尾さんの造語であることも知らないままにごく日常的に使うが、この200ページ足らずの新書が刊行された時に私たちに与えた衝撃は、その後こうした例をあまりみないように大きかった。

ついでに、ここで書いておくことにしよう。中尾さんの著作が翻訳されなかったことを残念だとする悔いは、多くのわが国の研究者による農耕関連の論文についても当てはまる場合が多いように思われることである。ひとりこの巻に掲載する論文だけでない。10数年間、私は『農耕の技術』誌の編集に関係してきて、そこに投稿されたたくさんの論文のなかには優に世界的水準に達しているものがすくなくないと思えた。仮にこの全8巻の論集が英語で出版でもされるとしたら、世界の研究者から、ひかえ目にみても、ひどく新鮮な業績集として評価されるに違いない。けっして自賛に過ぎることではなからう。

また中尾さんのことに戻るが、彼が『栽培植物と農耕の起源』に先がけて書いた「農耕起原論」という長い論文〔中尾 1967〕の方は、それほど広くは読まれていないようである（発表年次が1967年となっているが、〈付記〉にこの論文が1961年に脱稿し、印刷の都合で発表が遅れたことが述べられている）。

内容は、長年のフィールド・ワークで採集された世界の農業と食物に関する該博な新知識が、やや未整理、未完成のかたちで記述されている。まとめりとしては上の新書がまさるが、そこに至る一次資料として読むと、中尾さんの考えが構築されていく過程などがわかって興味深い。私は以前から、あたかもすぐれたアンソロジーともいえそうなこの論文を高く評価していて、飯島茂さんが編集された書物に、農業関係の参考文献と簡単なコメントを求められた時に、「中尾教授の数多い著作のなかでも、この一冊の命脈は最も長いであろう」と評したことがある〔飯島 1979〕。もっとも、こうした批評を中尾さんはあまり歓迎されなかったかもしれない。

そんなことがあって、この論文については書きたいことも少なくないが、幸いに『農耕の技術と文化』誌の最近号で佐々木高明さんが詳しく述べているので〔佐々木 1994〕、重複を避けて次の1点だけを付け加えておくことにする。

末尾の「反省と補遺」という項で、中尾さんが自分の学問の性格について次のように述べている点である。少し長いが、そのままに引用しておく。

「この重要な農業の起原とその発展や展開をいかに把握するか、その道はいろいろあろう。その一つとしてこの論文で採用したのは、〈農業のことは農作物自身に語らしめよ〉という方法である。それゆえここでは、栽培植物個々に関する研究が、それぞれの声として取り上げられたわけである。そして、個々の声を取りまとめるものとして、体系のある農作業や技術がそれを総括する。（中略）学問の分類からいってこのような研究は、いかなる分野に属するだろうか。それはいまのところ民族植物学 *ethnobotany* に属するというのが、いちばんよかろう。*ethnobotany* とは、いかなる学問であるか、あるいはあるべきか、などという議論は、このさい省略しておこう。ここで採用した方法は、一つの問題意識をもって、すなわ

ち農業の起原および発達の解明という縦軸をもって、歴史的事態の解明をもとめたものである。これは、ethnobotany の体系をつくらんとしたもの、ともいえよう。』

この章の最初に述べたところだが、本巻に収録した7篇の論文に共通した性格は、既成の学問的枠組みではくくりにくい。それをひとつにくるとすれば、中尾さんの学問を ethnobotany とされた前例にならって、それとはやや異なる概念の ethnoagronomy がふさわしいとしたいのである。

大学卒業時の専攻がそれぞれの研究者の学問領域を遅くまで固く規定するわけではないにしても、大なり小なりその影響を引きずっていることが多い。この巻の7名でみると、佐々木、應地の2氏は地理学、宮崎、廣瀬、福井の3氏は農学、長嶋さんは経済学、山中さんは社会学であって、その視点と方法はおのずから異なる。しかしながら、共通して、民族とその地域に強くこだわりをもつ立場から論文をまとめておられる点で、まさに ethnoagronomy と考えられる性格を共有するといえるようである。この言葉が今までに使われた例を私は知らないが、直訳して民族農学であろうが、「農学」の既成概念をさける、あるいはより学際的なふくらみをもたす上で、「民族農耕学」という訳語をひとまずは採用しておくことにする。

2. 農耕文化の研究方法について

前章に ethnoagronomy 「民族農耕学」という言葉をもって、本巻の論文に共通したひとつの研究領域を示しうるのはないかと述べた。「民族」という言葉にいささか違和感のようなものがあるとすれば、「特定の集団」と解しておいてよい。その中に「民族」も含まれるとした方が納得がえられ易いかもしれない。「発刊のことば」のなかにも述べられているが、何よりも人間の営みの学問として農業を把えようとするひとつの知的な試みがこうした論文として形をなしてきたと思うのだが、まだこれからの研究領域であって、しばらくは試行がつづくに違いない。

いずれにしても、民族なり集団が営む農耕の形態はきわめて多様で、極端に

いえば、地球上の地域には2つとして全く同じ農耕の事例は存在しないほどに千差万別であるといえる。農耕がいやおうなしに、その微妙な自然的諸環境、立地に制約されて行われる限り、きわめて当然なわけである。

形態がそうであれば、それを営む人たちの持つ農業の理論や、彼らのいわゆる農耕文化のパターンもまたそのように多様であるに違いない。こうした多様な農耕文化の研究について、基本的に考えておかねばならない1、2の問題を列挙して、今後の研究や調査の参考になればと思う。

まず、ここにいうところの農耕文化の意味を次のように平易に理解して話をすすめていくことにしよう。すなわち、「ひとつの民族なり集団がある地域に伝統的に営みつづける独自の農耕を通じて、彼らに生産と生活の規範を共有させるに至る秩序と価値観の体系」とでもいえよう。もっとも、こうした定義にあまりこだわることはないのかも知れない。文化ということにはある種の曖昧さがあって、いろいろのフェジーな事象がその内容にみられる。大枠としての農耕文化の性格が上のような定義でほぼ通用すると考えておくにとどめよう。

生産と生活の規範ということは、農耕にかかわる広義の技術一般は当然として、共同作業のシステムや方法、そうしたことを介しての社会の慣行と規律、共同体の組織と維持、豊饒への祈りと祭り、儀礼と信仰、また家庭における日常とハレ、食物の選択と料理などなど、精神と物質の諸般にわたる日常営為のおおたの総体の規範ということに他ならない。農耕文化の研究について ethnoagronomy からのアプローチは、こうしたすべての文化要素に向けられることになる。従来の学問領域からいえば農学や地理学はいうまでもなく、文化人類学、社会学、民俗学などのどの分野からの接近も可能な対象であって、その意味で農耕文化の研究とは文字通りにきわめて学際的領域であるといえる。

文明は時に「大文明」という表現が使われると同じように、農耕文化のモデルにも「大文化」と「小文化」を区別しておく、いろいろの現象を考えやすくと日頃から思っている。すなわち、アイデンティファイ可能なひとつのパターンが示す農耕文化の規模と範囲をどう認識するかということで、農耕文化にも「普遍文化」、「地域文化」あるいは「国民文化」などの色合いの違う諸段階が

あって、いま問題にしているのがどういう種類の文化モデルかを考えてみるのが大切だということである。もっとも農耕文化の「普遍性」などという、やや形容矛盾のようなことの論理的な性格となると、私にはうまい説明も浮かばないが、「普遍文化」とは相対的に規模の大きな文化モデルとして「大文化」に相当し、後二者はそれに対して「小文化」の段階と考えておく。いずれにしても、きちんと筋道をたてて説明できるほどに熟慮もしていないし、またくどくどと述べる紙数もないので、ひとつの簡単な例をあげてみて概略の意味を察していただくことにしたい。

アジアの広大な範囲に共通する稲作文化は間違いなく「大文化」であるが、その圏内であってモチ稲だけを栽培し、モチ米だけを日常的に食べつづけるラオスの人々の特異なモチ稲文化は地域文化であり、それを「小文化」と呼ぶということで大体の意味を理解していただけるであろうか。こんな区分がいろいろの場面に認められるが、概して私たちのフィールド・ワークの調査対象となる範囲は、どちらかという小文化に属する例が多く、本巻のいくつかの論文もそれである。その積み重ねの上に大文化の論議が登場するものといえる（前章の中尾さんの仕事などがそれに該当する）。私たちが行っている調査の対象が、大文化のどこに位置するかを常に考えておくことが研究遂行上の役に立つことが多いはずである。

大文化であれ小文化であれ、各民族が世界で展開する農耕について、どれが優れている、あるいはどれが劣っているかという比較は意味のないことである。この点について私はしばしばスタベンハーゲンの「文化的相対主義」にたつ次のような文章を引用することがある〔スタベンハーゲン 1981〕。

「文化とは、ある特定の社会を他の社会から区別するところの物質的および精神的諸活動とその生産物の全体である。（中略）文化的相対主義の視点が重要なのは、どのような文化表現についても先験的にその優秀性あるいは劣等性をいうことはなく、すべての文化要素はある特定の社会的ダイナミクスの結果であり、（その特定の）集団全体の必要にこたえるものであることを基本的に認めているところにある。このように理解するなら

ば、文化とは、人間のあらゆる集合体もっている基本的諸要素を満足させるという課題に対するある社会集団の答えにほかならない」。

このような、文化一般に対する基本的な考え方は、対象を農耕文化に限ってみても全く異なるところがない。どこの地域の農耕も、その中に自律するひとつの価値が存在する事を前提にして成立している限り、ひとつの基準をもって他の農耕文化を判断することはできない。このことは農耕文化研究の最も基本の姿勢であって、本巻の諸論文を読んでいただければわかるが、各執筆者が他国（地域）の農耕文化に向ける視線は、決して優者のそれではない。

私は農学プロパーの出身だが、この学問分野は西欧近代科学の影響のもとで、一定面積から最も高い収量をとる農業を是とし、また労働投下量の相対的に小さい農業をもって理想とするという単純な論理のもとに「進展」してきた。しかし、考えてみると、このような論理はたかだか200年程の間、主に西欧と日本などの近代社会においてのみ信奉されてきているにすぎない。

他のところでもすでに述べたが〔渡部 1990〕、今から30年前の北タイの農村では、稲の収量は「ほどほど」にとることが正しいと老人たちの誰もが考えていた。いたずらに収量の増加をめざして肥料や農薬などを投下する農業が「神（ビー）の摂理」に反するとみていた。

前述したようにこの地球上には農業の姿と同じ数の農耕の論理あるいは農業の「哲学」が、むずかしい理屈は別にして農民たちに受けつがれて存在している。「ほどほど」が正しいとするのもそのひとつの例にすぎないが、同じような考え方はここだけではなく、地球上の各地にみられるに相違ない。こうした論理を根底にすえた農耕文化が、地球の環境を守って今日に至っていることを考えておきたい。21世紀の世界を守るのも、今のままの近代農学の論理ではないことは、まず間違いないであろう。農耕文化の研究には、そうした未来への人類的、世界的課題への展望も持ちうるものと期待しておきたい。

3. 研究の展開をめぐる

表題に「解題」としながら、個々の論文のことを直接に述べてこなかったが、

以下に少し触れてみることにしよう。ここに収録したそれぞれの論文は、應地論文の発表が1979年と最も古く、福井論文1980年、宮崎論文1982年とつづき、廣瀬論文1984年、山中論文は1989年、比較的新しいものが佐々木論文の1992年、最も新しい長嶋論文が1993年となる。4つの論文がすでに10年を経過していることになる。それぞれが今日においても十分に刺激的な内容であるが、さらに著者らがそれ以後にどのように研究を展開されてこられたかを中心に、個々の研究のことを紹介してみよう。

長嶋さんの仕事は今まさに進行中である。今年も精力的にイベリヤ半島の沖に浮かぶ小さな（私などは名も知らない）島々などを回っておられて、すでに調査のために訪ねられた島の数で1,000を越えられたそうである。やがて、世界で初めて「島の農耕文化論」を体系的にまとめられる日も速くないように思われる。ちなみにいえば、長嶋さんの出身は佐渡島である。ご本人からの手紙によると、その出自とややモノマニアクと時にいわれることもあるという今日の島の研究とは無縁ではないのだそうである。面白いと思った。

巻頭に掲載した佐々木さんの論考は、佐々木さんの数多い著作と論文の中では取り上げられることが比較的少ない、やや時評的内容を含むものであるが、これに関連し、あるいは敷衍する文章として次のような近年の著作と論考がある。これらをさらに参考にいただければ、佐々木さんの考えがより鮮明に理解されるであろう。

佐々木高明（1989）：『東・南アジア農耕論—焼畑と稲作』弘文堂、東京
———（1993）：「稲作文化とは何か—その特色の基礎的再検討」佐々木
高明（編）『農耕の技術と文化』集英社、東京、21-46

その他の執筆者も、ご承知のように精力的な研究を次から次へと発表されておられる。各人ごとに個々の仕事ぶりを紹介していく紙数がないので、この巻に掲載した論文に関連する研究に限って、それが現在までにどのように展開してきているかを、その後に発表された著作を列記することで紹介に替えさせていただくことにする。各論文の主題が年月を経てより豊かなふくらみをみせていることに気がつかれるであろう。本巻収録の順に紹介していくことにしよう。

- 宮崎 昭 (MIYAZAKI, A.) (1987): Sheep Farming under Various Natural and Social Environmental Conditions. TANI, Y. (ed) Field Survey in Rumania and Greece. Kyoto University. Kyoto
- 廣瀬 昌平 (1986): 「畑作農耕技術の変貌と農民の農業観」 金沢夏樹 (編) 『農業と農村—渡辺兵力博士古稀記念論文集』
- (1991): 「半乾燥中・東部アフリカの農業と農法」 『国際農林業協力』 14巻 2号、48-62
- 山中 速人 (1992): 『イメージの〈樂園〉—観光ハワイの文化史』 筑摩書房、東京
- (1993): 『ハワイ』 岩波書店、東京
- 應地 利明 (1991): 「デカン高原における雑穀の栽培技術」 阪本寧男 (編) 『インド亜大陸の雑穀農牧文化』 学会出版センター、東京
- (1994): 「世界に誇るデカンの雑穀農耕」 辛島 昇 (編) 『ドラヴィダの世界』 東京大学出版会、東京
- 福井 捷朗 (1993): 「火耕水耨再考」 『史林』 76巻 3号、108-143

この中で、最後にあげた福井さんの力作については、あまりなじみのない問題であるので、若干の説明を加えておいた方がよいと思われる。「火耕水耨」という難しい言葉の意味をめぐって、中国史家の間では古くからいろいろの議論があった。この詳細については渡部・桜井共編のシンポジウム記録 [1984] を先に読んでいただくのが望ましいが、簡単に要約すると、中国江南の稲作地帯において3世紀頃から行われた古い農法で、水田で焼畑的な直播などを行う技術と、一般には理解されてきた。

これに対して、東南アジア稲作、とくにデルタに住む人たちの伝統的稲作の視点をふまえて、農学的見解を述べたのが本巻の福井論文である。大筋として、長江下流域の低平部で行われた粗放稲作で、焼畑的技術に加えて湛水によって雑草の生育を抑制し、要は、「火と共に水をも用いる」という点で、焼畑農耕と対照的であるが故に、刀耕火種と呼ばれる焼畑耕作に対して、低地の稲作に火

「水耨なる語をあてはめたものと思われる」とした。

その後、福井さんは1990年に河南、安徽の両省を実地に調査して、前報の論旨を若干訂正するとともに、この農法に対してかなり具体的なイメージを与えたのが「再考」である。詳しくは論文に当たっていただくのが望ましいのだが、結論の部分を引用してみると、「制御されていない季節的湛水のある低地で、春先に草焼をし、増水前に直播し、水深増加とともに雑草が抑制されるような稲作法。(中略)このような低地は、洪水防衛や排水とともにその面積を減少して行くが、それが最も困難なデルタなどの大低地に最後まで残存」したことを実証している。

ひとり福井さんに限ったことでなく、すべての執筆者が、私のみるところ、この巻に掲げた論文のモチーフをこれからも、ひとつのライフ・ワークとして発展させていくように思われる。刮目しておかねばならない。

参 考 文 献 (3. に掲げたものを除く)

- 飯島 茂 (編) (1979): 『アジア文明の原像』日本放送出版協会、東京。
- MURDOCK, G.P. (1959): *Africa. Its people and their culture history*. McGraw-Hill, New York.
- 中尾佐助 (1966): 『栽培植物と農耕の起源』岩波書店、東京。
- (1967): 「農業起原論」『今西錦司博士還暦記念論文集・自然一生態学的研究』(森下正明・吉良竜夫編)、中央公論社、東京。
- 佐々木高明 (1994): 「根栽農耕文化と雑穀農耕文化の発見」『農耕の技術と文化』17号。
- SAUER, C.O. (1852): *Agricultural origins and dispersals*. Amer. Geogr. Soc., New York.
- スタンベンハーゲン, P. (山崎春成ら訳) (1981): 『開発と農民社会』岩波書店、東京。
- 梅棟忠夫 (1994): 「中尾佐助との交遊」『千里眼』第47巻。
- 渡部忠世・桜井由躬雄 (編) (1984): 『中国江南の稲作文化』日本放送出版協会、東京。
- 渡部忠世 (1990): 「農耕文化の現代的意義」『農業と経済』第56巻、6号。